

# 健康とその戦略

## ■ ウイズコロナを考える ■

～ 2 ～



石井 正三氏

### 社会への衝撃は大

#### 歴史の歯車前に刻み続ける

世界がコロナ禍のパンデミックに見舞われ、もう二年も半ば、武漢（中国）に始まった大流行から数えれば足掛け三年目となる。

医師という職業柄、「これは何時（いつ）になって終わり、元に戻るのだろうか」という質問を時々受ける。その質問の重みは十分承知しているが、答えはそれほど単純ではない。なぜ単純でないのか、そこを掘り下げることから始めてみよう。

人類は何度も大災害や、大規模感染症に襲われた。記録に残る最近の世界的な感染症流行パンデミックは、第一次大戦終わりに流行したインフルエンザ「スペイン風邪」だ。ヨーロッパの大航海時代以降、貿易と植民地経営というビジネスモデルから権益の衝突で二十世紀初頭ついに第一

時世界大戦となった。

平時における人々の交流でも戦争という名の衝突でも、人と人、または動物との接触の機会も、ウイルス側から見ればほぼ同じように、次々と感染の輪を拡げていくのだ。地域を超えた感染パンデミックが何度も地球上を伝播すると、兵力維持は困難になって戦争が止まるという方向の効果があつたのかもしれない。

戦争による破壊と感染症による多くの犠牲者の結果、欧米で高度に練り上げられた文化スタイルは変化した。東西交流と豊かさの結実でもあつた絵画や工芸に見られるヨーロッパのオールヌーボー様式は、もつと簡潔なオールデコを経て、抽象画や色彩の爆発したようなフォービズムなど二十世紀のスタイルへと立ち止まらずに変化していく。

芸術音楽でもフランス・リ

ストの名技性継承の時代から、作曲も演奏スタイルも慌ただしく変遷した。第二次大戦後には、ポップスやロックなど大衆化による大規模な流行の波が世界を巡るようになった。プレスリーの大衆人気、ビートルズの社会現象。マイルス・デイヴィスの集団即興ジャズ。あの頃、音楽に浸るといふことは、生き方の改変でもあつた。

#### 生活習慣病へ舵切る

ライブで観た津軽三味線の高橋竹山は、不自由な目でかどつけ芸人として暮らした生活語りながら魂の底から絞り出す大焔（たいえん）の名人芸は、忘れ難い体験だつた。美空ひばりという大スターから石川さゆりの津軽海峡冬景色、一方でユーミンや竹内まりやのニューミュージックは最近のAKB 48ら若い世代以上の発信力があつた、と思う。

松原みきという歌手が四十年の時間を超えてアジアのネット上で再発見され、言葉の壁も超えて世界に拡散し、日本に影響が戻っているとい

う。本人はもう癌（がん）でお亡くなりになっているのに、残ったTVの映像や写真などが掘り起こされ、そういえば英語で歌つたジャズソングもあり、バックバンドのキレも良い。パンデミックにさらされた社会は、元に戻るのではない、こんな風に歴史の歯車を前に刻み続けるのだ。

以前なら死亡の上位を占めた不慮の事故や結核を含めた感染症は癌、心臓病、脳卒中に席を譲つた。世界保健機関（WHO）も二十一世紀を迎えた目標として、感染症や栄養失調対応といった方針から、途上国向けに生活習慣病対応を主目標にする舵（かじ）を大きく切つたのだ。

しかしどっこい、コロナウイルスだけみても、二十一世紀に入って中国由来のSARS、サウジアラビアなどで流行したMARSなど繰り返し行っている。例年のインフルエンザに混じって流行する風邪の二、三割にコロナウイルスがあるとも言われている。アフリカ起源のエボラ出血熱など、熱帯病や風土病が拡散す



世界中に蔓延、甚大な被害を出しているコロナウイルス。日本国内でもようやくワクチン接種のスピードは上がってきたものの……=文とは関係ありません

その点で、今回の新型コロナウイルス禍は、死亡率はそれほどではないが、長期にわたる社会的インパクトの大きさが特徴的だ。ウイルスは人種や貧富などにかかわらず感染リスクがある。その意味では超リベラルな存在だ。

ゴキブリの撲滅もできてない人類が地上に広がる以前から、既にこの世界には吸血昆虫やリケツチャ、細菌、ウイルスなどが満ちていたのだ。多細胞生物の成功者であっても、一個人のヒトは、皮膚

るアウトブレイクはなくなっていない。スペイン風邪は世界を何度も駆け巡って終息に三年間かかった、と記録されている。日本の新型コロナ禍がこれからどうなっていくのか。ワクチン接種は、漸く多くの国民に行き渡り始めた。集団免疫という概念があり、実際の感染の結果でもワクチンその他の方法によって、コミュニティ社会の中で三分の一人の人がこれを獲得すれば流行のスピードはグッと遅く

なり、三分の二が獲得すれば流行は終息に向かうとされている。毎年のインフルエンザ流行をみれば、十一月頃からワクチン接種が始まり、冬休み以降に本格的流行を迎えて桜の咲く頃に下火になっていく。このイメージで考えれば、決して万能とは言えなくても手洗い、マスクなど様々な防衛策を積み上げ、さらにワクチン接種が進行している現状は、本格的対応のフェーズに入ったと言える。

## 空虚なスローガン

ただし、日本では当たり前のような「手洗い」が多くの途上国では難しい。頭に壺を載せたりする水汲みが毎日の生活に組み込まれている風物には、映像としては美しいが人々には重労働を強いるし、その水にも日本の水道水のよくな信頼性はないのだ。清潔なマスクを洗って身につけるという習慣も同じように難しい。

検疫 quarantine という概念はラテン語の四十日という意味から来ていて、人とモノの交流が実現したときに感染症対策として船を四十日間待機させる知恵だったのだ。多くの文明において、戦争や疫病、そしてその両方によって、都市の放棄による遺跡化が起こったのだ。災害や疫病対策は国の運営にとって不可欠な要素で、そのための知恵の伝承や祈りの場も常に必要だった。

表面に常在菌、体内にも腸内細菌などを多数同居させて病原性細菌を抑え込んでいる。人類は多くのモノたちの海に浮かび漂っているような存在なのだ。まして変異形の多いRNAウイルスのパンデミック下で、国際交流の門を大きく開けば何が起るのか。辛うじてバランスされたシーソーで向こう側のお菓子を取るような軽拳は控えながら、みんなで行動することが歴史の検証を受けるために必要なのだ。

|| 続く

## 筆者プロフィール

石井 正三

(いしい・まさみ)

地域医療連携推進法人医療戦略研究所所長・代表理事、長崎大学客員教授、ハートバード公衆衛生大学院名誉武見フェロー、東日本国際大学健康社会戦略研究所所長・客員教授、医療法人社団正風会理事長

